

【3】中世の名古屋…③萱津東宿 ④織田信長

1 名古屋の中世

中世と呼ばれるのは、鎌倉時代、室町時代、 そして戦国時代です。この時代で名古屋が誇 り得るものには、何があるのでしょうか。

まず挙げられるのは、信長、秀吉、家康の 三英傑でしょう。なかでも「信長」は、名古屋 と最も深く係わりがある人物です。ところが いろいろな誤解があってか、あまり名古屋で の存在感が無いように思われます。これは残 念なことで、何とか誤解を解き、名古屋の大 切な遺産としなければなりません。

二つ目に取り上げたいのは、中世都市「萱津東宿」です。中世という時代は、政治の拠点が東国・鎌倉に移ったため、京の都と鎌倉を結ぶ道路が重要な意味を持つようになりました。その、全国でもトップクラスの拠点に萱津宿(西宿、東宿)があったのです(図 1)。

この他には、豊臣秀吉や、それに続いて金沢や熊本に移って地域に大きな影響を与えた前田利家や加藤清正も、名古屋で生まれ、名古屋で育ちました。この付近では、ほかにも

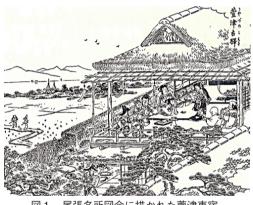


図1 尾張名所図会に描かれた萱津東宿。 川の近くに遊女の茶屋が画かれている

多くの戦国武将が生まれており、名古屋の中世は、源頼朝に始まり、信長、秀吉、利家、清正等と、全国に展開した多くの有名な武将を輩出したところでした。

今回は、このような視点から中世名古屋の 遺産を考えてみたいと思います。

2 中世の物語

(1) 萱津東宿 …「都市」の萌芽

日本の中世という時代の特徴は、武家政治

として東国の鎌倉に政治の拠点があったことでしょう。そのため京と鎌倉との間の交流が盛んになり、その間を結ぶ京鎌倉往還(以降:鎌倉街道)が国土の幹線として重要な役割を持つようになりました。そしてこの時代は、盛んにその紀行文が書かれた時代でもありました。

名古屋の西北に隣接する萱津(清須市)は、その鎌倉街道沿いにあり、旧道である古代東海道を経由する伊勢路と、新道である古代東山道を経由する美濃路との合流点でした。しかもそこは五条川と庄内川が合流する地点でもあって、古来、渡しが設けられていました(図2)。そのため早くから「宿」が形成されることになり、その範囲も川の東の対岸、名古屋市側にも広がることになったと考えられています。

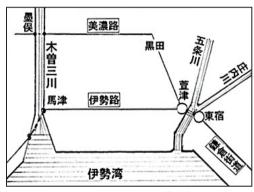


図2 鎌倉街道の要の萱津宿。 川の東西に宿が拡がった

鎌倉時代、その東宿の状況を記録した紀行文があります。中世三大紀行文の一つとされる『東関紀行』(1242年)で、「市」が形成されていたこと、賑やかな村落があったことなどが読み取れます(図3)。そしてそこは、「すでに単純な交通集落の域を脱して都市化への道を歩みつつあった」と評価されているのです(文献②)。

中世は、都以外にも都市が生まれた時代で した。全国に、港町、門前町、宿場町等が生 まれていますが、萱津東宿は、まさにそれら 萱津の東宿の前を過ぐれば、そこらの人あつまりて、 里もひびくばかりにののしりあへり。今日は市の日にな むあたりたるとぞいふなる。往還のたぐひ、手ごとに、 むなしからぬ家づと(土産)も、かのみてのみや人にかた らんとよめる花のかたみには、ようかわりておぼゆ。

花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならでかえる家づと 尾張の国熱田の宮にいたりぬ。……

古今集:素性法師「みてのみや人に語らぬ桜花 手ごとに折りて 家づとにせむ|

図3 『東関紀行』に記された萱津東宿の状況 の先駆けだったと考えられるのです。残念なことは、その跡が消えてしまったことです。 理由は、河川の氾濫があったこと、市場や茶屋、歓楽施設等の都市的施設が消滅しやすかったことなどでしょうか(文献④)。

しかしただ一つ、「女郎墓(じょろばこ)」と呼ばれる古い墓地が残りました。現地は、小さな、特徴もない墓地ですが、中世の萱津東宿の栄華を伝える貴重な史跡になったといえます。

(2)織田信長 … 誤解された? 英雄

織田信長は、日本史の中でも指折りの英雄 といえる人物です。ところが、大物ゆえに誤 解されることの多い人物でもあります。

その一つは、若いころ「大うつけ」と呼ばれる変人であったということ。二つは、武力での征服を目標に掲げた「野蛮さ」でしょうか。そして、あまり名古屋人とはとられていないことも気になります。

信長の生誕地は、近年では津島のそばの勝幡城とされます。しかし物心がついたころには那古野城(現名古屋城内)に移りました。そして以降22歳で清須に移るまでの20年近い多感な青春時代を、名古屋で送っています。13歳での元服、14歳での初陣、18歳での結婚と家督相続、そして20歳での初子誕生と、人生の多くの節目は名古屋時代だったのです。

その青春時代は、「大うつけ」と評価されや すいのですが、実際の姿は、馬術・水連に励み、 鉄砲を習い、兵法を学び、古典を読み解く日々だったようです。そして街に出ては政治や経済の実情を学んだのでしょう。その人物の評価は、18歳の時の斎藤道三との会見に現れました。外見は大うつけに見えても、いざとなると立派な大器に成長していたことが証明されたのです。

その信長の人生の岐路も名古屋でした。27歳の時の、今川義元軍との桶狭間の戦いです。『信長公記』の語る彼は、まさに戦略家です。①情報漏れの無いように味方を欺き、②勝利のない籠城戦を回避し、③敵方の情報収集を評価し、④相手軍の疲労を考え、そして⑤目標は「大将の首」一点に絞りました。驟雨を幸運に変えたのも、その勢いがあったればこそ、だったのでしょう。

信長は、比叡山を焼き払うなど、仏を疑い、また神を恐れませんでした。そのために誤解されることも多いのです。たとえば岐阜で発した有名な「天下布武」という言葉も、「武力で天下を制圧する」ととられます。しかし、「武」という言葉は、中国の古典『春秋左氏伝』以来、「七徳の武」をさすとされます。その意味は、「暴を禁じ、戦をやめ、大を保ち、功を定め、民を安んじ、衆を和し、財を豊かに

登城すると、信長卿は殊のほか喜び、「私が天下を治 めた時、朱印が必要になる。前もってご朱印の字を頼み たい。」と命じた。

沢彦は、再三断ったものの、堅く請われたので、断り 切れず

"布武天下"という字を書き付けて、進上した。

信長卿は、「寒空の季節に滞在していただき、朱印の字が整ったとのこと。私の考えそのものの字である。ただ、文字の数が四つなのは、いかがなものか。」と言った。 沢彦は、「大明国は皆、四字です。日本では四字が嫌われておりますが、ご自身の不確かな風説で御座います。」 と答えた。

信長卿は、殊のほか喜色を浮かべ、花井伝右衛門を呼び、「朱印の字について沢彦と話し合ったから、黄金で判屋に彫らせよ。」と仰せ付けられた。…

図4 信長は、「天下を治めた後」の 朱印文字を求めている(『政秀寺古記』訳) する」の七つの徳で、それらを兼ね揃えた者が天下を治めるのに相応しいという意味です。 1567年、師の沢彦宋恩和尚から与えられました(図4)。

「武」という漢字は、「戈」を「止」めると書きます。天下布武とは、まさに戦国の世に、天下の泰平を見通した言葉だったのです。

(3)その他

<武将の輩出>

戦国時代の尾張は、信長に続いて、次々に 有名な武将が出ました。尾張の家系では、池 田恒興、堀尾茂助、山内一豊、浅野長政、前 田利家といった武将がいます。また秀吉の家 来では、蜂須賀正勝(小六)、福島正則、加藤 清正。そして豊臣政権の5奉行だった増田長 盛、長束正家など。多くはその後、大藩になっ た大名です(図5)。

武将	関ケ原戦の従軍	石高(万石)	領 国
堀尾 吉晴	東軍 子:忠氏	17→24	浜松→松江
山内 一豊	東軍	7→20	掛川→浦戸
浅野 長政	東軍 子:幸長	16→38	甲府→和歌山
前田 利家	東軍 子:利長	83→119	金沢(拡大)
蜂須賀正勝	東軍 子:至鎮	17→25	徳島・淡路
福島 正則	東軍	20→49	清須→広島
加藤 清正	東軍(九州鎮圧)	25→52	熊本(拡大)
丹羽 長秀	西軍(前田軍):長重	13→没収	小松
増田 長盛	西軍(大阪城)	20→没収	郡山
長束 正家	西軍	5→没収	水口

図5 関ケ原戦に参戦した尾張出身の主な武将。 東軍多く、戦後大藩になっている

利家は、中川区の荒子付近の土豪出身で、 信長の家来となり、出世して、秀吉、家康に仕 え、最後は加賀百万石の大大名になりました。 秀吉は、よく知られているように、中村の 出身で、信長に仕えて身を起こし、最後は天 下人になりました。

清正は、秀吉と同じ中村の出身で、縁戚関係から秀吉に仕え、武功を遂げて出世し、家康のもとで名古屋城建設等にも力を発揮し、最後は熊本に行って、その繁栄の基をつくったとされます。

このように、時代のトップを行く人材が一

地域に集中するのは、幕末の長 州藩と同じだといえます。長州 には吉田松陰という教育者がい ました。尾張には信長・秀吉と いうリーダーがいたのです。そ のもとに、地域の人材が集まり 育てられたのでしょう。

戦国の尾張は、豊かな濃尾平野にあって、国土の幹線街道が通り、物資の流通や各地の情報が行き交いました。その中で、実力主義の信長・秀吉が勢力を広げて若者達を競わせたのです。

そこに多くの人材が育ったといえるのではないでしょうか。

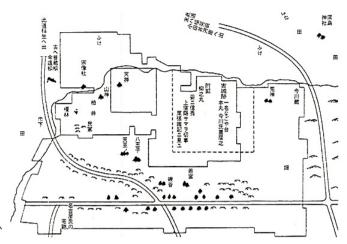


図6 名古屋城築城前の古図。 道の他、社、寺、家等、城下の存在が読み取れる

3 紀行 青春の信長

… 本町通沿いに残る足跡 …

織田信長は、青春から成人に至る時期を、名 古屋で過ごしました。その痕跡が今の名古屋 の街に残っているのでしょうか。名古屋城か ら熱田社へと、その跡を追って歩いてみます。 **〈那古野城址から〉**

信長が10年近く城主だった那古野城は、 現在の名古屋城の二の丸にあったとされます (図6)。地下鉄の市役所駅北改札を通り、7



二の丸にある那古野城址の碑

番出口を出て名古屋城に向かいます、現在の名古屋城の東門は二の丸の中で、そのすぐ中に、「那古野城址」の碑が建てられています。

白い案内板を遠くから眺めた後、バックして横にある県体育館に沿って西に進み、二の丸西大手門を出ます。堀を渡って左に進むと官庁街です。その2本目の東西の道は、那古野城の城下の道だったと考えられ、その後「中小路」と呼ばれ、東区の白壁町まで続きます(図6の横の道)。



那古野城の中心的道路だったと想定される 「中小路」跡の道(県庁正面の道)

南に進むとこの道は城を出て、本町通になります。付近には「中市場」という字もあったようで、この辺りは城下町が出来ていたのかもしれません。まっすぐ進み、桜通を渡って右に行った所に桜天神社があります。ここは元の万松寺の内部になります。父信秀の葬儀



信秀の葬儀が行われた元の万松寺内にあった天神社 が行われて信長が抹香を投げつけた所です。 寺は後の築城で大須に移されましたが、その 中のお社だけが、現地に残されたのです。

本町通を南に進み、高速道路の通る若宮大通に出たら左に曲がります。那古野城の近くから移された若宮八幡の東隣に、政秀寺があります。信長が、その傅役で、切腹した平手政秀を弔って建てた寺です。最初は小牧城南にありましたが、清須を経て、ここに移されました。



信長の傅役で、切腹した平手政秀の寺。 信長が小牧に建立し、後にここに移された



現在の万松寺には、信秀の墓が移された。 改修工事で隅っこにある

元の本町通を南に進み、4本目を左に入ると移された現在の万松寺があります。寺は最近大きな改修工事が行われており、その背面の角にひっそりと、織田信秀公廟所の碑が立っています。近くには、信長が安土城に建立した総見寺もあります。

<古渡城址を経て>

本町通に戻り、南に進みます。門前町を通り過ぎ、橘町に入ってすぐ、右手奥に神社が見える道があります。日置神社です。この社は、10世紀の延喜式に載る式内社で、信長が桶狭間戦に向かう時、この社にも詣でました。霊鳩の瑞果があったため、信長は、戦争後、神域に松千本を植えて礼をしました。残念ながら松は残りませんが、戦国時代からの棟札が存在します。



桶狭間戦に向かう途中に立ち寄って 「瑞果」のあったとされる式内日置神社

南に進み、国道に合流してすぐの大きな古 渡交差点を東に行くと真宗の東別院がありま す。この寺域一帯に、信秀が築城し、信長が



東別院の境内西にある古渡城址の碑

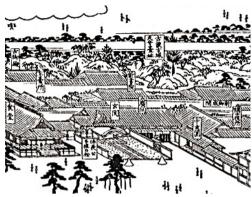


図7 尾張名所図会の東別院の図に 描かれた「古渡古城天守台址」

元服した古渡城がありました。門を入った左手に古渡城址の碑が建ちますが、城の天守台は寺の東門を出て隣接する下茶屋公園の中にあったと、尾張名所図会は想定します(図7)。

さてここからまっすぐ南に2キロ強で熱田社になります。名古屋台地のこの付近は、まっすぐ進めたのかもしれませんが、明治時代には、東側の大津通を南に進む旧道が残っていました。大津通の金山橋を渡ってすぐのY字の分岐を右にとり、旧道を進むとしばらくして国道に合流し、熱田社なります。

熱田社は、明治時代に大きく変えられました。信長の頃は、宮が四角く囲われており、東・西・南に門がありました。信長は桶狭間戦ではこの西門から入り、戦勝を祈願し、桶狭間



熱田神宮の「信長塀」。 桶狭間戦の戦勝の礼に築いた

に向かいました。そして戦勝の礼にと、周囲の塀を立派にしました。これが、一部が残っている「信長塀」です。

当時は、その南は潮が入った所でした。信 長はその先を遠望しつつ、東に迂回して桶狭 間の戦場を目指したといいます。

4「なごや」の街は500年

名古屋の街は、1610年が開府とされます。 今は400年を少し越えたところです。

しかしその前にも、100年近い歴史があるのです。大永年間、すなわち1520年頃、今川家が柳之丸と呼ぶ城を築きました。那古野城の前身です。その頃がどんな姿だったかは分かりませんが、1538年に信秀が城を奪った時には城下に火をつけていますので、連担した街があったようです。そして信長の頃にはいくつもの寺や社があり、町屋が並んでいます(図6)。この状況は、近年の三の丸の発掘結果等からも想定できそうです(文献⑤)。

「開府」という発想は、あくまでも、江戸時代の発想です。今日のように、歴史が解明されてきた時代には、名古屋の街は500年の歴史があるということを主張すべきではないでしょうか。あと数年で、「なごや」の街ができて500年になるのです。

〈主な参考文献〉

- ①玉井幸助『東関紀行』(1997、岩波文庫)
- ②新城常三『鎌倉時代の交通』

(1962、日本歴史叢書・吉川弘文館)

③泉秀樹『信長 戦いの若き日々』

(2017、㈱PHP研究所)

④蔭山誠一、加藤博紀他「中世萱津を考える」

(2007、愛知県埋蔵文化財センター研究紀要8)

⑤松田訓「遺構からみた那古野城の残影」

(2002、愛知県埋蔵文化財センター研究紀要3)